

〈論 説〉

# 幸徳秋水と中国天義派の 平民主義とアナキズム

— 『共産党宣言』の翻訳を端緒に —

孟 芮 竹

## 目 次

はじめに

第一節 幸徳秋水の『宣言』和訳の背景と彼の思想転換

- 1 幸徳が『宣言』を翻訳する歴史的背景
- 2 幸徳のアナキズムへの思想転換

第二節 幸徳秋水の思想転換前に中国の知識人が幸徳から受けた影響

- 1 中国の知識人の『宣言』に関する最初の紹介及び彼らと幸徳との関係
- 2 中国の改良派と革命派が幸徳から受けた影響：1903-1907年

第三節 幸徳秋水の思想転換後に中国の天義派が幸徳から受けた影響

- 1 『宣言』翻訳にみる幸徳秋水の平民革命 — 「平民」と「紳士」
- 2 天義派の『宣言』翻訳にみる幸徳の平民主義の受容：1908年

むすび

## はじめに

マルクス主義の最も重要な文献の一つである『共産党宣言』<sup>1)</sup>は、1848年に「共産主義者同盟」の綱領としてドイツ語で発表されて以来、繰り返し各国語に翻訳され、世界各国に広く影響を与えてきた。日本では、1904年11月に『宣

1) 本稿ではとくに『共産党宣言』と表記した方が良いと思われる場合を除いては、たんに『宣言』と略記する。

2) 2005年に東北大学の「『共産党宣言』の普及史と影響」という研究は、マルクス／エンゲルスの没後、世界各国・地域のさまざまな言語で刊行された『共産党宣言』が101種類に及ぶこと、そして、日本語で刊行された『共産党宣言』の翻訳が1904年の幸徳秋

言』の日本語訳が幸徳秋水と堺利彦の手によって登場し、それが日本最初の訳本であった。<sup>3)</sup>この日本語訳の刊行が、日本の初期社会主義運動においてマルクスの社会主義が本格的に受容される重要な契機の一つとなった。とりわけ、1910年末から1920年の時期には、ロシア十月革命の勃発、第一次世界大戦の終結、米騒動など、国内外で大きな出来事があり、当時の日本では社会主義・共産主義に関する著作を出版する波が起きていた。幸徳の『宣言』の翻訳は、その先駆けとなるものであった。

他方、幸徳の翻訳は、『宣言』が中国語に翻訳される際に中国の知識人たちによって参照されたという意味でも重要である。周知のように、日本は、欧米の先進的な文化をアジアでいち早く導入していたため、自国の近代的な改革を図ろうとする中国の知識人にとって、先例となるものであった。このことは、マルクス主義の受容においても例外ではない。とくに、1904年に幸徳・堺の『宣言』の初訳が発表されて以来、この日訳本が翻訳の際の重要な底本として参照されてきた。たとえば、1907-1908年の時期には、天義派の何震、劉師培、民鳴など中国のアナキストたちが、幸徳・堺の日訳本に基づいて『宣言』の序言と第1章の全文訳および第2章の抄訳を中国語で発表した。<sup>5)</sup>その後1920年に

---

水と堺利彦の初訳以来、最新の『マルクス・コレクション』（2008年）所収訳稿にいたるまで計84点を数えることを明らかにした。以下を参照。大村泉・窪俊一・橋本直樹「『共産党宣言』普及史研究の到達点と課題（1）」『経済』第130号、2006年7月、108-118頁、大村泉「日中両国における『共産党宣言』の受容＝翻訳史概観」『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第49号、2008年6月、27-36頁、大村泉「幸徳秋水・堺利彦訳『共産党宣言』の成立・伝承と中国語訳への影響」『大原社会問題研究所雑誌』第603号、2009年、1-13頁。

- 3) カルル・マルクス、フリードリヒ・エンゲルス「共産党宣言」幸徳秋水、堺利彦訳、『平民新聞』第53号（1904年11月）、『幸徳秋水全集』第5巻、精興社、1968年、399-446頁。
- 4) 周知のように、日露戦争が差し迫った1903年10月に、幸徳秋水と堺利彦は、戦争支持を表明した万朝報社を辞め、週刊『平民新聞』を創刊して社会主義運動を行った。堺によれば、当時、代表的な社会主義者である安倍磯雄や片山潜も『共産党宣言』の題名は知ってはいても、まだ内容について閲読できていない状態であった。大村泉「日中両国における『共産党宣言』の受容＝翻訳史概観」『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第49号、27-36頁を参照した。
- 5) 陳力衛「让语言更革命——『共产党宣言』的版本和译词的尖锐化」『新史学』第2巻、

は、マルクス主義者の陳望道が『宣言』を中国語の全文訳で刊行した。その際に陳が底本としたのは、幸徳・堺の日訳本（1906年<sup>6)</sup>と、マルクス主義者の陳独秀が北京大学から借り出し、陳に貸し与えた英訳本であった<sup>7)</sup>。このように幸徳・堺の『宣言』の日本語訳は、中国の知識人が『宣言』を中国語で紹介するうえで重要な参照文献であったといえるが、天義派の人びとがアナキズムの観点から幸徳の思想的影響を受けたのに対して、陳の場合にはあくまでマルクス主義者としての翻訳上の参照であったと考えられる。本稿で、天義派の翻訳プロセスに焦点を当てるのは、このような幸徳の平民主義やアナキズムの思想的受容に注目したからである。

『宣言』の受容史についての研究は、日本ではこれまで相対的に立ち遅れていた。『宣言』は、戦前においては、政府によって「禁書」に指定され、翻訳物の所持や出版が厳しく禁止されていた。さらに戦後には、東西冷戦のイデオロギー対立と国内の保革対立という政治状況のなかで、『宣言』はしばしば政治闘争の影響を受けることとなった<sup>8)</sup>。このような経緯から、『宣言』の日本語訳の受容や影響について歴史的に研究されることが少なかったといえる。しかし近年、『宣言』に関する優れた研究が出されている。たとえば、玉岡敦は、戦前の日本における『宣言』の翻訳を、幸徳と堺という社会主義者の訳本、マルクス経済学者の訳本、内務省警保局の訳本という三つのルートに分けて考察している<sup>9)</sup>。また、大村泉は、幸徳が翻訳した『宣言』の日本語訳の中国における影響を、とくに1920年の陳望道の訳本に焦点を当てて検証している<sup>10)</sup>。ただ

---

中華書局、2008年、192頁。

6) Karl Marx and Friedrich Engels「共産黨宣言 The Communist Manifesto」幸徳秋水、堺利彦訳（『社会主義研究』第1号、1906年掲載）、『幸徳秋水全集』第5巻、447-509頁。

7) 大村泉「日中両国における『共産黨宣言』の受容＝翻訳史概観」、30頁。

8) 玉岡敦「二战前日本『共産黨宣言』翻譯普及史概述—以堺利彦、幸徳秋水译作为中心」『马克思主义哲学研究』2018年第1号、13頁。

9) 同上、12-24頁。

10) 大村は、「国家」と「国民」という訳語の選択に即して、幸徳らの日本語版と陳の中国語版との訳語上の一致を指摘している。ただし、両者の思想的な理解についてまで考察してはいない。なお、大村の研究は、陳の訳本と戦後中国の標準訳との比較も試みており、「民族」や「祖国」や「暴力」といった表現の訳語が先鋭化した形で現れた事実を指摘している。大村泉『日中両国における「共産黨宣言」の受容＝翻訳史概観』、第

し、これらの研究においては、1920年以前の日本と中国における幸徳の『宣言』翻訳の思想的意義と日中の初期社会主義者たちの思想的交流については取り上げられていない。

他方、中国での従来の研究は、共産党史の枠組みの下に置かれていたため、強い党派性を帯びている。中国社会主義の形成において日本が果たした影響は、その考察対象の点で中国共産党員に限られている。そして、日本から受容したマルクス主義の著作が中国の共産党の成立に及ぼした側面を強調する。しかし、中国における『共産党宣言』の普及、特にその初期の普及については、マルクス主義者に限定できるわけではなく、国民党や他の政党、さらにはアナキズムをはじめとする多様な社会主義の理解と受容を考察する必要がある。こうした研究上の制約について、2008年に中国人民大学教授の蒲国良が「『共産党宣言』の中国伝播史の研究におけるいくつかの問題」という論文のなかで、次のように指摘している。「中国における『共産党宣言』の普及、特にその初期の普及についての研究は、翻訳本、全訳本、公式的な出版物の貢献に限定することはできない。思想の伝播は、非常に複雑なプロセスであった<sup>11)</sup>」と。近年では、こうした指摘を踏まえたくて新たな研究が現れている。たとえば、方紅と王克非の研究では、19世紀末から1920年頃までの中国における『宣言』翻訳に焦点を当てて、とくに外国人宣教師や朱執信、宋教仁といった後述する同盟会の革命派による断片的翻訳について詳細に研究している。しかしながら、天義派のアナキストの翻訳については検討されてない<sup>12)</sup>。

このように複雑なプロセスをもつ『宣言』の受容史を考察する際には、われわれは以下の点に留意する必要がある。すなわち、『宣言』は共産主義の象徴

3章を参照。

11) 蒲国良 「『共産党宣言』在中国傳播史研究中的几个問題」『湖南师范大学社会科学学报』、2008年、13頁。

12) 方紅、王克非 「『共産党宣言』在中国的早期翻译与传播」『外国语文』第27号、2011年12月、107-116頁。さらに、近年の研究では、天義派の翻訳について取り上げた研究も現れているが、しかし本稿が考察したような幸徳の平民主義やアナキズムの思想的受容については触れられていない。譚淵 「『共産党宣言』汉译历史与译本演变」『同济大学学报(社会科学版)』第3号、2018年、84-98頁、陳紅娟 「『共産党宣言』在中国的翻译与传播」『马克思主义研究』第4号、2018年、24-33頁。

的かつ綱領的な文書であり、実践的革命的なニュアンスを含んでいることから、異なる言語間での翻訳にあたって、訳者がそのニュアンスを自国の状況に照らしてどう解釈したか、という問題がそれである。『宣言』の翻訳作業は、それぞれの国の時代状況や政治的文脈との相関性があり、その意味で多様な表現形式をとりえる。翻訳という作業のなかには、それぞれの訳者が置かれた多様な政治的立場や文化的伝統、社会的構想といったコンテクストのなかでの訳者自身の思想的営為の跡が現れているといえよう。マルクス主義が翻訳を通してヨーロッパ以外の地域に受容される際には、翻訳者自身の政治的理念や社会主義革命への理解がとくに〈訳語の選択〉という思考作業のなかに現れる。したがって、その研究においては、各訳者が翻訳の過程で、異なる歴史的文化的な背景のなかでどのような語彙を選ぶことで自身の政治的観念を表現しようとしたのか、を分析する必要がある。とりわけ『共産党宣言』のような綱領的文書の場合には、こうした受容史的な究明が重要となる。本稿の目的は、以上のような問題意識に立って、訳者の翻訳の際の意図や背景を当時の歴史的な文脈のなかで探り出しながら、マルクスの『共産党宣言』が日本語への翻訳を通して思想的にどのような形で受容されたのか、またその日本語訳が20世紀初期の中国の初期社会主義者のマルクス主義理解にどのような影響を与えたのか、を考察することにある。このような問題設定と研究手法に立った『宣言』の受容史は、日中両国におけるこれまでの研究史に新たな貢献をなしえるものと考えられる。

第1節ではまず、20世紀初期に、幸徳をキーパーソンとした社会主義者の知的サークルが存在していたことを確認し、その思想的雰囲気のなかで幸徳や堺がマルクスの『共産党宣言』を当時の日本の状況や歴史的背景に即して、どのように翻訳をおこなったのかを明らかにする。さらに、1907年の幸徳の思想転換がどのような性格のものであったかを説明する。第2節では、幸徳が1905年に入獄する以前の時期に、留日学生や改良派、革命派などの中国の知識人たちがマルクスの『宣言』を日本から中国へ紹介した社会主義の受容史を考察し、そして、1907年に幸徳が「アナキズム」に転向した後、こうした日中の社会主義者の知的交流という背景において、中国の革命派がどのような変化を示したのかを検討する。続いて、第3節では、1908年に中国の「天義派」が翻訳した

『宣言』を取り上げ、アナキズムに傾斜した革命派の人びとが『宣言』を中国語に翻訳する際に、幸徳が彼らに与えた影響を検証する。以上のように、『宣言』の日中への翻訳という局面に着目しながら、幸徳秋水の平民主義とアナキズムの思想形成と中国天義派の社会主義者たちによるその受容を明らかにすることが本稿の目的にほかならない。

## 第一節 幸徳秋水の『宣言』和訳の背景と彼の思想転換

### 1 幸徳が『宣言』を翻訳する歴史的背景

明治維新後の一連の改革によって封建的な政治体制が終わりを告げ、日本は近代国家への道を歩み始めた。薩摩の武士の反乱が政府軍によって鎮圧された後、天皇の政治的権威は強くなった。さらに、明治政府は忠誠心や愛国心を軸とした教育勅語を制定し、中央と地方に神社神道を設置することによって、天皇に大きな神聖性を与えた。その際、特権的な身分を喪失した士族や、政府の増え続ける税金を負担せざるを得なかった農民が国の各地で頻繁に反乱を起していたが、日本政府は強大な国家の軍隊でそれらの運動を弾圧した。1886年以降、大規模な綿紡績企業が設立され、日露戦争後の工業化された生産過程が確立していくにつれて、資本主義の下での労働者問題が次第に現われ、それ<sup>13)</sup>にとともに社会主義運動も盛んになり、日本政府の統治にとって新たな脅威となっていた。1901年の社会民主党の成立は、20世紀初期に登場した「初期社会主義」と総称される運動・思想の始まりとして<sup>14)</sup>みることができる。

1901年に、安部磯雄、片山潜、幸徳秋水を中心とする社会民主党は、1891年10月にドイツの社会民主党が採択した「エアフルト綱領」を参照しながら党綱領を作成した。周知のように、合法的範囲において労働者の正当な権利を求めるといふ社会民主党の戦略は、同党が主導する第2インターにも引き継がれた。ドイツでは、ビスマルクが制定した『反社会主義法』が廃止された後、ドイツ社会民主党は、議会政策路線で闘争を続け、政権の掌握をめざした。日本

13) 山田盛太郎『日本資本主義分析』岩波文庫、1997年、32-33頁。

14) 梅森直之『初期社会主義の地形学：大杉栄とその時代』有志舎、2016年、32-33頁。

においても、当時の社会主義者は、後に大きな思想転換を遂げる幸徳を含めて、日本社会で格差の問題を解決するには、何よりもまず平和的な政治経済革命が必要であると考えていた。<sup>15)</sup>

幸徳は、当時の日本における社会主義運動のキーパーソンの存在であった。彼は、幼い頃から儒学の古典を修養し、その後、自由民権運動に強い関心を抱き、1888年に中江兆民の学僕となった。中江が幸徳に対して「漢籍」の勉強から始めるよう勧めたため、幸徳は中江のフランス自由民権思想を、儒学を媒介としながら吸収することとなった。<sup>16)</sup> このような幸徳の思想的特徴は、彼が「帝国主義」の批判を展開する際にも重要な要素となっている。『20世紀之怪物 帝国主義』において、幸徳は、帝国主義を「愛国主義」と「軍国主義」という二つの構成要素に分け、帝国主義の成立要因と目的を説明したうえで、孟子の「惻隱」（同情心、憐憫の意味）に関する定義を参照しながら、愛国主義と軍国主義の批判を展開している。幸徳によれば、そもそも愛国心とは、共同体を形成する過程で自生的に涵養される郷土愛的なものであったが、明治政府はその本来の意味を歪めて、愛国心を天皇制への愛に置き換え、軍国主義に還元したのである。他方、「帝国主義」は、経済的に見れば、少数の政治家や軍人、投機師たちの私欲を満たすにすぎず、「貧富は益す懸隔しつつある」。彼らは「国民多数の生産を妨害し、其財貨を消糜し、其生命をすら奪ふ」、と。このように幸徳は、帝国主義を国内における貧富の格差拡大の要因と見ている。<sup>17)</sup> ここには、本稿の第3節で後述するように、幸徳が後に『共産党宣言』を翻訳する際に、「Bourgeois」の術語を「資本家」ではなく、あえて「紳士」という訳語をあてて、そこに日本の閥社会における既得権階層に読み換える視点がすでに現れているといえよう。

---

15) ドイツ社会民主党はビスマルクの「反社会主義法」の廃止に触発されて、直接選挙権、提案権、拒否権を軸とした議会闘争によって政権獲得をめざすという路線を選択した。John Crump, *The Origins of Socialist Thought in Japan*, London: Routledge, 2010, pp. 188-195.

16) 大原慧「遺稿・幸徳秋水の『社会主義』思想」『東京経大会誌』第144号、1986年、23頁。

17) 幸徳秋水「20世紀の怪物 帝国主義」（1901年4月）、『幸徳秋水全集』第3巻、117、173-174、196頁。

さらに、幸徳は、1903年7月に『社会主義神髓』を刊行し、社会主義について体系的に論じた。この作品は、明治期の初期社会主義が到達した思想的な水準を示すものである。彼は、『共産党宣言』と『空想的社会主義から科学的社会主義へ』を通して、マルクスの社会主義について説明するなかで、次のように述べている。「然り高尚なる品性と偉大の事業とは、決して社会貧富の両極端に在らずして、常に中間の一階級より生ずる者也…而して社会を挙げて是等中等民族と為さんとするは、是れの目的とする所に非ずや」<sup>18)</sup>と。ここには、第3節で幸徳の『宣言』翻訳について考察する際に後述するように、社会主義革命をブルジョワジーとプロレタリアートの両極関係を把握するのではなく、「中間階級」が革命において果たす役割を積極的に捉えようとする、彼の「平民革命」という構想の端緒が現れている。

その後、幸徳は、日露戦争の開戦が迫る1903年10月、堺利彦、内村鑑らとともに萬朝報社を退社し、同年11月、左翼の小島龍太郎<sup>19)</sup>から資金援助を受けて、キリスト教系社会主義者（安部磯雄など）と自由民権運動左派の活動家（堺など）を合流させて「平民社」を結成し、週刊『平民新聞』<sup>20)</sup>を発刊することとなった。『平民新聞』創刊号の巻頭に掲げられた宣言文のなかで、幸徳は「平民革命」を提唱した。「吾人は人類の自由を完からしめんがために平民主義を奉持す…吾人は人類をして平等の福利を享けしめんが為に社会主義を主張す…吾人は人類をして博愛の道を尽くさしめんが為に平和主義を唱道す…」と。彼の平民主義あるいは平民革命の理想は、「多数人類の完全なる自由、平

18) 幸徳秋水「社会主義神髓」（1903年7月）、『幸徳秋水全集』第4巻、501-502頁。

19) 小島龍太郎は中江兆民の門下であり、自由党左派系の「前期の運動者」である。堺は「共産党宣言日本訳の話」において、小島についてこう懐述している。「我々が一週年記念の趣向について色々考へをこらして居る中、『宣言』を我々にすすめて呉れたのは、小島新太郎であった。小島君は中江兆民の弟分くらいにあたるフランス学者で、その少し前頃まで衆議院の書記官を務めたりして、自由党左翼の間に於ける社会主義グループの先輩であった。『平民新聞』を起こした時、彼は我々（殊に秋水）パトロンとして、種々の援助を我々に興へてくれた。その援助の最大なるものが実に『宣言』翻訳の勧告であった」（『労農』第4巻第2号、1930年4月、57頁）。

20) 1903年12月に片山潜が渡米して以降、当時の平民社は日本の社会主義者の主たる陣営となった。卢坦『日本明治时期社会主义思想研究』中国社会科学院出版社、2016年、162-163頁を参照した。

等、博愛を以て理想とす」との彼の言明に示唆されている通り、前述した中江兆民の急進的な自由民権思想の素地のうえに社会主義を受容しようとしたものであった。<sup>21)</sup>

他方、国際的には、彼らは、第二インターと関係の深かったロシア社会民主党に積極的に接近して、アジアで社会主義者の連合を試みる。1904年3月13日に、幸徳は『平民新聞』に掲載された「与露国社会党書」と題する記事の中で、当時敵国であったロシアの同志の支持と協力を求めた。「然れども社会主義者の眼中には人種の別なく地域の別なく、国籍の別なし…諸君の敵は日本人に非ず、実に今の所謂愛国主義也、軍国主義也」と言明し、「マルクスの『万国の労働者よ、団結せよ』の一言は、真に今日に於いて実現せしめざる可らず、希くば我等諸君と極力此事に従はん<sup>22)</sup>」と締めくくっている。同年7月に、ロシアの社会民主党は『イスクラ』に幸徳への公開書簡を掲載し(レーニンかトロツキーの執筆と言われている)、日本の労働者階級が率先して連合を提案したことは、当時のリープクネヒトやベーベルが国際社会主義に貢献したのと同じように、「歴史上重大の文書と謂はざる可らず」と返答した。<sup>23)</sup>日露の社会民主党が、それぞれの国益を超えて互いの結合を求める動きは、1904年7月に第2インターの第6回会議の開会式で、片山潜とロシア社会民主党の代表のブレハーノフが共同で大会の副会長に選出され、二人が熱烈に握手を交わす展開へとつながった。

以上のように、幸徳派を中心とした日本の社会主義者に確認される、①帝国主義に対する批判、②中等階級を動員した平民革命の運動、③社会主義者の国際的連帯の推進、という歴史的背景のもとで、『平民新聞』発刊1周年にあたる1904年11月に、幸徳と堺は、小島龍太郎の提案を受け入れる形で『宣言』の翻訳に着手したのである。堺の回想によれば、当時、2人の翻訳者はドイツ語が分からなかったため、小島が提供した1888年のサミュエル・ムーア(Samuel Moore)による英訳版をもとに逐語訳を試みた。<sup>24)</sup>『平民新聞』の1周

21) 「平民新聞(宣言)」、『平民新聞』(1903年11月)、『幸徳秋水全集』第5巻、23頁。

22) 片山潜『日本の労働運動』岩波書店、1952年3月、343-345頁。

23) 同書、345頁。

24) 堺「共産党宣言日本訳の話」『労農』第4巻第2号、1930年、57頁。

年記念号となる第53号（1904年11月13日）において、幸徳と堺によって翻訳された『共産党宣言』の第1章、第2章、第4章が掲載され、これが日本で最初の『宣言』の日本語版となったのである。<sup>25)</sup>

この1904年の『平民新聞』の記念号は、内務大臣によって報道規制の第33条（公の秩序を乱すこと）に抵触すると判断され、第23条により配布・公布が禁止された。しかし、堺は「単に歴史上の事実とし又は学術研究の資料として新聞雑誌に掲載する」という理由から、1906年3月に『社会主義研究』の創刊号において、堺と幸徳という二人の署名で『共産党宣言』を全訳版で再度、発表<sup>26)</sup>した。

## 2 幸徳のアナキズムへの思想転換

1904年11月13日に『宣言』の和訳が発表されると、『平民新聞』は即日発禁処分となった。幸徳は、1905年2月に新聞紙条例違反で投獄された。7月に釈放された後、彼は11月にアメリカへと渡ることとなるのだが、この時の獄中生活において幸徳は、アメリカの老友ジョンソンから贈られたクロボトキンの『田園・工場・製作所』読破して次第に無政府主義思想に接近していった。1905年8月に彼が書いた日記にはこう記されている。すなわち、「其の出獄するに際して」、彼は「過激な無政府主義者となって娑婆に立ち戻りました」と。そして、彼は「欧米漫遊」を企図した。その目的は、「コムミュニスト又はアナキストの万国的連合運動」を推進するために外国話を勉強するとともに、「多くの外国革命党の運動」を学ぶことにあつた。出獄後の幸徳は、「天皇の毒手の届かない外国から」、政治組織と経済制度を自由に論じることを意図したのである。<sup>27)</sup>幸徳は、かつての国際的連帯の路線、すなわち日露戦争を回避せん

25) 1904年の訳本では、幸徳と堺は、荘重な文語文で『宣言』を翻訳し、「当時欧州の諸政派中には我国現時の諸政派と相似る者なきに非ず…原稿縮切の日時は切迫して訳文未だ其半に達せず」として、社会主義と共産主義文書を論述する第3章を省いていた。幸徳秋水／堺利彦訳『共産党宣言』、週刊『平民新聞』、『幸徳秋水全集』第5巻、443-444頁を参照した。

26) Karl Marx and Friedrich Engels 「共産黨宣言 The Communist Manifesto」、『幸徳秋水全集』第5巻、447-509頁。

27) 幸徳秋水（著）塩田庄兵衛（編集）『幸徳秋水の日記と書簡』未来社増補決定版、

とする非戦論の観点から、議会政策路線を採るロシアの「社会民主党」との連携を推進するという、第二インターのなかで描いた社会主義者の国際的連帯の構想を放棄して、入獄・渡米後の幸徳は、アナキストを含む直接行動論的な社会主義運動の国際的連携を図る路線に方向転換した。この変化は、一体どのようなして起こったのか。直接的な理由としては、筆禍による二度の投獄で、幸徳は明治政府の社会主義者に対する排斥的な態度の残酷さを体験し、議会政策で政権を掌握するという第二インターの政治路線による日本での変革の可能性に絶望したことである。さらに言えば、このことが幸徳をして、議会政策路線に代わる新たな革命戦略を模索する必要性を認識させたといえる。

このことは、ロシア革命（1905年）前後に前景化していたポピュリズムやアメリカのシカゴで活動していた「世界産業労働者同盟」（IWW）が提唱する「直接行動」論に彼が注目していた点に現れている。1905年にロシアの革命家たちの広範なストライキ、農民と軍の反乱により、ツァーリ政権は一連の民主的改革を実施せざるを得なくなり、これが世界中の革命家たちが直接行動の戦術を取り入れるきっかけとなった。そのなかで、西欧各国の社会党からは、ドイツ社会民主党が採る議会政策路線は、議会制度それ自体がブルジョワの産物であるとして、その「ブルジョアの性格」を疑問視していた。ドイツ社会民主党は、簡単には方針を変えようとしなかったが、フランスでは、ジョージ・ソレルのサンディカリズムに導かれ、産業暴動が頻発し、労働組合は自信を深めていた<sup>28)</sup>。さらに、このサンディカリズムは英米に影響を与えて、ギルド社会主義運動やIWWの直接行動など、さまざまな特殊な運動を呼び起こした<sup>29)</sup>。当時のIWWは、アメリカの労働総同盟が中国、日本、韓国の労働者を差別視することに反対し、これらのアジアの労働者を積極的に組合員に加えていた<sup>30)</sup>。こうした動向に触発されて幸徳は、1906年6月の帰国後の講演において、IWWの

---

1990年5月、153-156頁。

28) James Joll, *The Second International 1889-1914*, London: Routledge, 1974, pp.131-134.

29) 石川三四郎『社会主義運動史』日本評論社、1929年1月、159-165頁。

30) John Crump, *The Origins of Socialist Thought in Japan*, London: Routledge, 2010, pp.457-468.

暴力的なゼネストを提唱した「直接行動」論に惹かれたことを言明している<sup>31)</sup>。

しかし、中間階級の役割を重視する平民革命の構想をもつ幸徳が、ナロードニキ運動に見られたような、財産と教養をもたない民衆それ自体が社会変革の主体になりえるというポピュリズム運動に、なぜ惹きつけられたのであろうか。それは、幸徳の「志士仁人」の理想とロシアのポピュリズムとのあいだに、ある種の共通性を彼が見て取っていたからにほかならない。すでに述べたように、幸徳の社会主義は儒教の伝統のうえに形成されており、日本の伝統的な武士の道徳をそなえた「志士仁人」こそが社会変革の主体になりえると考えられていた<sup>32)</sup>。志士仁人のこうした人格要件は、本来、ポピュリズムとは相容れない性格のものである。しかしながら、幸徳は、ロシアのポピュリズムのなかに「民衆へ」という運動の理念とその運動を担ったロシア革命派のリーダーが果たした役割に注目していたのであり、それが幸徳の志士仁人の人格理想と重なり合ったのだと考えられる。幸徳は、ロシアの社会革命派のプレシコウスカヤを「志士仁人」にたとえて、大衆を導く存在として称えているからである<sup>33)</sup>。投獄される前夜、幸徳は週刊『直言』に、ロシア社会民主党の穏健主義的な政策が「人心」を得てない事実を批判するとともに、ポピュリズム運動を牽引するロシア社会革命党を支持する記事を掲載している<sup>34)</sup>。渡米後に幸徳が、アメリカ亡命中のロシア革命家たちと接触したのもこうした背景があったからだと考えられる。幸徳がロシア革命のなかに見た〈世界革命の予兆〉とは、民衆を動員する運動論のあり方という点において理解されるべきものであり、実際に幸

31) 幸徳秋水「世界革命運動の潮流」（1906年6月28日）、『幸徳秋水全集』第6巻、97頁。

32) 辻野功「指導者失格の幸徳秋水」『同志社法学』第48巻第3号、1996年9月、116-141頁。

33) 「露国革命の祖母 — プレシコウスカヤ女史」（1905年2月5日）、『幸徳秋水全集』、第5巻、342頁。

34) ロシア社会革命党は、1890年代に生まれたいくつかの革命組織と北ロシアの地方の社会主義グループを統合した政党であり、それは1902年に設立された第2インターのもとで労働者の経済的条件の改善だけを目指すロシア社会民主党に不満を持ち、「民主社会主義」と「農村社会主義 (rural socialism)」を提唱した。Christopher Rice, *Russian Workers and the Socialist Revolutionary Party through the Revolution of 1905-1907*, London: Macmillan Press Ltd, 1988, pp. 18-21.

徳はこれ以後、アメリカの社会主義諸団体と積極的に連携を進めたのである。<sup>35)</sup>このように、すでに獄中でクロボトキンの著作に共感していた幸徳は、アメリカ亡命中のロシアの革命派との交流を通して、アナキズムの思想と運動へといつそう傾斜していったのだといえよう。天皇権力の弾圧に直面した幸徳は、アナキズムのなかに革命の運動論としての可能性と展望を見出したのである。

また、前項で述べた幸徳の「非戦論」の文脈から言えば、幸徳は日本政府が唱える愛国心が「天皇制への愛」という虚偽性をもつことを指摘して、天皇への忠誠を否定していたが、幸徳は他方で、社会の進歩の基礎を「真正科学的知識」に置き、人類の福利の源泉を「真正文明的道徳」<sup>36)</sup>に求めている。幸徳はこの「真正文明的道徳」によって、明治国家が構築した天皇制への愛を軸とした虚偽の道徳に対して対抗しようとした。さらに、入獄以後にアナキズム思想へと傾斜するなかでも、幸徳は、社会の進歩をめぐる自身の観念を、民衆のなから自律的に展開される啓蒙活動として発展させることで「社会」なるものを構想していたと考えられる。社会と国家をこのような形で二元的に分離するなかで、後述するように、幸徳は国家を不要なものとして考え、民衆の啓蒙的活動のなかに自律的でアナキカルな社会の連帯を構想していくのである。このように、幸徳の〈思想転換〉を考察する際に重要なのは、入獄以前の幸徳の平民主義思想と入獄以後のアナキズム思想とのあいだには一定の連続性が存在していたという点である。幸徳が抱いていた「志士仁人」の理想は、ロシアのポピュリズム運動のなかに彼が看取した民衆による自律的な社会の可能性と結びついていたと考えられる。

こうした幸徳の思想と運動における転向は、その後、日本の社会主義者たちに影響を与え、論争を巻き起こした。1907年2月に開催された日本社会党の第2回大会で、党綱領における普通選挙運動の項目を削除するという幸徳の提案<sup>37)</sup>

---

35) アメリカに滞在していた幸徳は、アメリカ社会民主党 (SPA)、アメリカ社会主義労働党 (SPL)、世界産業労働者連盟などの会合に頻繁に出席し、社会主義を実現するための性質や手段について思索した。John Crump, *The Origins of Socialist Thought in Japan*, London: Routledge, 2010, pp.504-505.

36) 幸徳秋水『帝国主義』、『幸徳秋水全集』第3巻、115頁。

は、幸徳と田添鉄二の間で激しい論争を呼んだ。会議での採決では、幸徳派が圧倒的に優位になった<sup>38)</sup>。それ以来、幸徳を中心とする「直接行動派」と片山潜を中心とする「議会議政策派」は、お互いに攻撃しあい、罵りあう関係へとなっていった<sup>39)</sup>。一方、1907年7月に第2次桂内閣が誕生すると、社会主義者への弾圧が強められていった<sup>40)</sup>。「大逆事件」以降、戦前の日本の社会主義運動を完全に弾圧した。社会主義思想は危険思想と見なされ、一部の翻訳や学術雑誌に掲載された文章を除いて、ほとんどの社会主義文献が禁止され、『宣言』もまた発禁本となった。

## 第二節 幸徳秋水の思想転換前に中国の知識人が幸徳から受けた影響

### 1 中国の知識人の『宣言』に関する最初の紹介及び彼らと幸徳の関係

幸徳が『宣言』を翻訳する以前にも、日本に滞在する中国の知識人たちは、日本から中国へマルクスの社会主義を個別的・散発的な形で紹介していた。日清戦争で敗北を喫した後、中国の知識人たちは国を救う方法を模索したいという渴望から、海外に留学し、国外の思想と文化を中国に紹介した。とりわけ1896年以降、日本に留学する中国人学生の数は飛躍的に増加した。この時期、

37) 幸徳秋水「余が思想の変化」(1907年2月)『幸徳秋水全集』第6巻、107頁。

38) 吉川守閔、前掲書、152-158頁。

39) 卢坦、前掲書、280頁を参照した。

40) 桂内閣は、アメリカ滞在中の学生が天皇暗殺を企てた事件、幸徳の直接行動論を支持する大杉栄や荒畑寒村らの一派が検挙された「赤旗事件」、そして幸徳が天皇暗殺を企てたとされる「大逆事件」で社会主義を弾圧していた。

41) 1840年から1842年にかけてのアヘン戦争の敗北は、清帝国の統治の失敗を告げ、中国を封建社会から半植民地・半封建社会へとさらに縮小させただけでなく、清政府が長期にわたって外界から隔絶していたという鎖国の弊害も露呈した。中国人の多くは、自らの国家を強盛な大国とは考えなくなっており、外国の文化を拒絶するのではなく、積極的に求めるようになった。1874年に、容閔がアメリカ留学を志願し、中国人の海外留学への道を開いた。そして、彼は多くの困難を乗り越え、曾國藩や李鴻章などの清国政府の官僚を説得して、百人の幼い子供たちのアメリカ留学を支援した。1870年代後半、海軍の近代化を進めるために洋務派も相次いで若い学生や軍官をヨーロッパに留学させた。これが中国におけるヨーロッパ留学の始まりである。さらに、1895年の日清戦争後、北洋艦隊の敗北が民族の危機意識を高めた。その結果、多くの中国の知識人は国と

日本では社会主義の研究とプロパガンダが盛んになっており、中国の国内改革に関心を持つ先進的な中国知識人の一部が、日本滞在中に日本の社会主義に関する著述に触れ、それを中国へと紹介する活動を積極的に展開した。1900年12月、中国人留学生は、東京で「譯書彙編社」という翻訳団体を設立し、『譯書彙編』を発刊した。これは留学生が刊行した最初の出版物であった。1901年第2期の『訳書彙編』のなかには、有賀長雄著『近世政治史』を坂崎斌が中国語に翻訳したものも掲載されている。この『訳書彙編』のなかで、留学生は西洋の近代的な教義を積極的に普及し、マルクス率いる国際労働者協会やその協会の綱領や情報を提供するとともに、『共産党宣言』を抄訳の形で紹介していた。<sup>42)</sup>

清朝体制内での近代化を推進しようとする改良派と、清朝体制の打倒を狙う革命派の二つの路線が存在したが、それぞれ経緯は異なるものの、ともにマルクスの社会主義を紹介していた。一方で、清朝の改良派官僚であった梁啓超は中国において「戊戌変法」<sup>43)</sup>を試みたが、失敗に終わり、1898年に日本に亡命した。その際、彼は孫文、章太炎といった革命家たちと交流しながら、革命のための言論活動・啓蒙活動を日本の地で展開した。1902年9月15日に、『新民叢報』第18号において、梁は「進化論革命者頡徳之学説」と題する論文を掲載し、そのなかで「麦喀士（マルクス）」を「社会主义之泰斗（社会主義の巨人）」<sup>44)</sup>として称賛している。こうしたマルクスへの直接的な言及のほかにも、中国の改良派の知識人は1902年以降、日本の社会主義者の著述を積極的に翻訳し、そのなかで間接的にマルクスが紹介された。たとえば、日本に留学してい

---

民族を救うための方途を求めて、日本への留学が新たな選択肢となった。1896年、政府は唐宝輔を含む13人を日本に派遣し、東京高等師範学校で学ばせた。その後、日本への留学ブームが起り、日本に滞在する留学生の数は数十倍にまで増えた。この日本留学の波は後に、「これまでの世界の歴史の中で最大の学生運動だった」と言われる。費正清『剑桥中国晚清史（下）』中国社会科学出版社、1985年、393頁を参照。

42) 実藤恵秀『増補版 中国人日本留学史』黒潮出版社、1981年、259-260頁。

43) 「戊戌変法」とは、中国、清朝末期の政治改革運動である。康有為・梁啓超らが中心になり、議会政治を基礎とする立憲君主制の樹立をめざした。光緒帝の支持を受けたが、西太后ら保守派の弾圧（戊戌の政変）によって失敗した。

44) 梁啓超「進化論革命者頡徳之学説」、(『新民叢報』第18号、1902年9月15日掲載)、『中国近代期刊彙刊第二輯 新民叢報 第3巻』、中華書局、2008年6月、1568頁。

た改良派の学者である趙必振は、1902年に幸徳の『帝国主義』を翻訳し<sup>45)</sup>、さらに1903年2月には、福井準造の『近世社会主義』を翻訳し、上海の『新世界学報』に掲載している<sup>46)</sup>。

他方、革命派の代表である孫文は、マルクスの社会主義を体系立った形で把握しようとした最初の中国人の一人であった。孫は清仏戦争の頃から政治問題に関心を抱き、1894年1月にハワイで「興中会」という革命派の組織を結成した。翌年、広州蜂起が失敗した後、彼は世界を渡り歩いて革命運動を展開するようになった。ロンドン滞在中の1897年1月から7月初旬にかけて、孫は見聞を広めるなかで欧米先進諸国が抱える社会的矛盾を認識し、実践的な革命理論について集中的に研究していたという<sup>47)</sup>。1903年に、日本に滞在していた孫は日本の社会主義者である幸徳と親密に連絡し、社会主義について意見を交わしていた。その際に注目しておきたいのは、彼は社会主義に接近するなかで、貧富の差を縮小し民生の安定を図る「民生主義」という、彼の「三民主義」<sup>48)</sup>を構成する柱の一つとなる観念を形成したという点である。孫によれば、中国は、工業化が進んだヨーロッパ諸国の場合とは異なり、資本主義の段階を経ることなく、ヨーロッパよりもいち早く社会主義に移行することができるという<sup>49)</sup>。

幸徳が「平民革命」を唱えたのに対し、孫は反・清体制の観点から「三民

45) 葛静波「『帝国主義』在清末中国: 译介、认识与话语」『西南大学学报(社会科学版)』第45卷第2期、2019年3月、174頁。

46) 徐亜芳「日本对『共产党宣言』在中国早期传播的影响」『都会遺踪』第32期、2020年5月、第10頁。

47) 林代昭、潘国華「马克思主义在中国一从影响的传入到传播(上)」清华大学出版社、1983年、255頁。

48) 「三民主義」とは、孫文が唱えた民族主義、民権主義、民生主義を合わせた政治理論である。

49) ヨーロッパに滞在経験をもつ孫によれば、当時のヨーロッパの社会主義には、「共產社会主義」、「集産社会主義」、「国家社会主義」、「無政府社会主義」の四つの形態が確認されるが、実際には共產社会主義と集産社会主義の二つに集約される。共產社会主義が理想ではあるが、中国においてそれは実現困難であることから、集産社会主義を採用することになる、と。ここに国家による集産という意味での民生主義が唱えられる。孫中山「在上海中国社会党的演说」(1912年10月)『孫中三全集』第2巻、中華書局、1982年7月、508-509頁。

50) 楊奎鬆『海市蜃楼与大漠绿洲』上海人民出版社、1991年、28頁。

主義」を提唱した。1905年5月に、孫はブリュッセルにある第二インターの執行委員会を訪れ、執行委員長エミール・ヴァンデルヴェルデ (Emile Vandervelde) と書記のカミーユ・ヒュースマンス (Camille Huysmans) と会談して、中国の革命派を集团的に第二インターに加入させる提案した。そして、その3ヵ月後には、東京の赤坂区の民家で「中国同盟会」が正式に設立された。この同盟会には、三民主義を唱える孫や彼の盟友である朱執信のほか、さらには章太炎、張継といった後に劉師培とともにアナキズムに傾斜する革命派の知識人たちも参加していた。孫はその機関誌となる『民報』の創刊号で「三民主義」を唱え<sup>51)</sup>。「私は民族、民権の問題を解決するとともに、民生主義を採用することにした」。彼は「民生主義」は社会主義だと信じ、「20世紀は民生主義の時代でなければならない」と考えた。<sup>52)</sup>

また、孫文の盟友であった同盟会の朱執信は、1905年11月に、『宣言』を抄訳して『民報』で発表した。その際に彼が抄訳したのは、マルクスが「階級闘争」について記述した箇所であった。<sup>53)</sup>彼の意図は、清朝体制を転覆するための有効な手段として社会主義革命を捉えていたのである。このように、中国の知識人たちがマルクスの社会主義、あるいは『宣言』に接近した意図や思惑には多様な立ち位置が存在していたのだといえよう。

## 2 中国の改良派と革命派が幸徳から受けた影響：1903-1907年

1903年から1906年にかけて、改良派や革命派による社会主義理論の受容とプロパガンダは、幸徳秋水の思想的影響を一定程度、受けていると見てよい。第一に、前述した幸徳の帝国主義批判も、中国の知識人に影響を与えている。たとえば、改良派の梁启超は、『新民丛報』に『二十世纪之巨灵托辣斯』を発表し、幸徳秋水の帝国主義論に基づいて、帝国主義が経済的格差を生み出すことを指摘した。<sup>54)</sup>第二に、平民社の社会主義に込められていた人道主義の多様さ

51) 孫中山「『民報』発刊詞」(1905年11月)、田曉青編集『民国思潮读本』第1巻、作家出版社、2013年05月、225頁。

52) 孫中山『孫中山選集』(上)、人民出版社、1956年11月、172頁。

53) 蛭伸(朱執信)「德意志社会革命家小传」(『民報』第2号、1906年3月掲載)、广东省哲学社会科学研究所历史研究室編『朱執信集』(上)、中華書局、1979年、67頁。

という点も、20世紀初期中国の知識人が社会主義を理解する際に影響を受けた要素である。たとえば、革命派の孫文は、「社会主義は、人道主義である。人道主義は、博愛、平等、自由を唱えた。社会主義の本質は、この3つに他ならない。これは人類の福音である」と主張している<sup>55)</sup>。第三に、幸徳の進化論に基づいてマルクスの社会主義を理解したことも、20世紀初期の中国の知識人における日本の社会主義の影響である。幸徳は、マルクスが人類社会の領域におけるダーウィンの学説の継承者であると考えており、さらに両者の関係について「社会主義は進化論に従って社会の進化を説くものであつて、決して進化説に戻るものではない<sup>56)</sup>」と論じたことがあった。1903年に、革命派の馬君武は、『譯書彙編』第2巻第11号の「社会主義と進化論の比較」という論説のなかで、「マルクスは唯物論で歴史学を解釈した人である。マルクスは、階級闘争こそが歴史の鍵だと言った。マルクスの言うところは実際にダーウィンの趣旨に合ったものである<sup>57)</sup>」と言明している。このように、幸徳の思想は、中国の改良派と革命派の知識人の双方に重要な影響を与えていたといえる。

さらに、こうした幸徳の影響は、彼がアナキズムへと思想転換した後にも確認される。中国の革命派のなかには孫文の三民主義を支持する一派と、幸徳の影響を受けてアナキズムへと転向する後述の「天義派」とが存在していた。帰国した幸徳と最初に付き合ったのは革命派の張継であった。1906年末から1907年初頭に張は、欧米におけるアナキズムの思想的な起源を紹介した。そして、当時、東京で発行されていた『民報』には、革命派の一人である廖仲愷が執筆した「アナキズムと社会主義」という論説など、アナキズム関連の記事が多く掲載されていた<sup>58)</sup>。

天義派と呼ばれる革命派の指導的立場にあったのが、劉師培である。彼は、

54) 梁啓超「二十世纪之巨灵托辣斯」、『新民叢報』第40、41号合巻、1903年11月2日、12月2日に掲載。

55) 孫中山『孫中山文集』(上)、北京团结出版社、1997年、325-328頁。

56) 幸徳秋水「進化説と社会主義」(1902年10月)、『幸徳秋水全集』第4巻、376-382頁。

57) 馬君武「社会主义与进化论比较」(『譯書彙編』第2巻第11期、1903年2月掲載)、姜義華『社会主义学说在中国的初期传播』复旦大学出版社、1984年、70頁を参照。

58) 孫建昌『社会主义学说在中国早期译介与传播(1900-1908)』山東大学博士論文、2014年10月、66-67頁。

1907年2月に、上海で反清体制活動を行った咎で清朝から逮捕令状が出され、妻（何震）とともに東京に亡命し、孫文たちが立ち上げた同盟会に加入した。1907年3月26日、幸徳秋水は、章太炎と張継の連名で、「挨拶：明日の午後1時にあなたの家に行って教えを聞きます、どうか私を見捨てないでください」という葉書を受け取った。この手紙は、幸徳秋水の東京の邸宅（大久保村中白蓮町）に送られたが、何らかの理由で会談が延期された。坂本青馬によれば、明治40年（1907年）4月に入って、張継、章太炎、劉師培、何震の4人が、北一輝の紹介によって一緒に幸徳秋水を訪ねた。北一輝には、張や章、劉らを、中国革命を支える日本における勢力として生かそうとする意図があった。しかしながら、同盟会に結集した革命派の知識人たちは、この後、分裂することになる。当時、清国政府は日本政府に孫文の国外追放を要請していたが、これに対して日本当局は孫文に金銭を払うことで、国外退去の措置を講じ、孫もまたそれに応じたのである。この孫の行動は、急進的な社会主義者の章太炎らからは裏切り行為とみなされた。この事件をきっかけに、同盟会は、孫文らを中心とするグループと、章太炎・張継を中心とするグループとに分裂することとなった。そこには、孫と張らとのあいだに伏在していた、共産社会主義にいたる前段階において国家が果たす役割をどう捉えるかという見解の相違が伏在していたと考えられる<sup>59)</sup>。

同盟会が分裂して以降、劉師培と何震は1907年6月10日に『天義』を発刊し、そして日本の社会主義者である幸徳、堺、山川均、大杉栄らと親密に交流しはじめた。『天義』発刊の意図は「既存の社会を破壊し、現政府を打倒すること」にあり、そこにはアナキズムの思想的影響が現れている。さらに8月になると、劉師培、章太炎、張継らは、孫文の民族革命の偏りを指摘し、中国に社会主義を導入するために「社会主義講習会」を立ち上げた。そして同年秋、彼らは東京で「アジア親和会」を設立した。その一年後、劉師培と何震は、『天義』の第15巻（1908年1月）において、在日留学生であった民鳴に『宣言』の「序」を翻訳させ掲載した<sup>60)</sup>。さらに、『天義』の第16-19合巻（1908年3月）

59) 楊奎鬆、前掲書、52頁。

60) 『『共产党宣言』The Communist Manifesto 序言』民鳴訳、『天義』第15巻（1908年

においては、劉師培自身が『宣言』の中国語版の「序」を執筆し、『宣言』の第1章を民鳴に翻訳させた<sup>61)</sup>。このように、『宣言』の1908年の中国語訳の発表は、前述した朱執信の1905年の翻訳とは異なり、幸徳の影響を受けてアナキズムへと転向した、いわゆる「天義派」の手によってなされた点が重要である。

### 第三節 幸徳秋水の思想転換後に中国の天義派が幸徳から受けた影響

#### 1 『宣言』翻訳にみる幸徳秋水の平民革命 — 「平民」と「紳士」

1906年に発表された日本語全訳版の『共産党宣言』は、中国の天義派の人びとによって参照されたが、この日本語訳版のなかで幸徳と堺は、「Bourgeoisie」を「紳士」と、「Proletariat」を「平民」と訳出した。「今の社会は全體に於て、刻一刻に割裂して、兩個の相敵視する大陣營、直接に相對立する二大階級を現じつつあるなり。何の階級ぞや。曰く紳士、曰く平民<sup>62)</sup>と。もとより幸徳と堺も、「紳士」と「平民」の訳語が本来の原語の意味とは異なることを十分に理解していた。彼らが底本とした1888年の英語版の序文において、エンゲルスが「ブルジョワ」と「プロレタリア」の術語に関して、次のような明快な定義を施しているからである。「ブルジョワ (bourgeoisie) によって意味しているのは、近代の資本家階級のことである。すなわち、社会的な生産手段と賃金労働者を所有する者である。プロレタリア (proletariat) が意味するのは、近代の賃金労働者 (wage-labourers) 階級のことである。すなわち、自身の生産手段を持たず、生きるためには自身の労働力を売るほかない賃金労働者である<sup>63)</sup>」。幸徳と堺は1904年の日本語版の『宣言』のなかで、エンゲ

1月) 掲載、『中國資料叢書6 中国初期社会主義文献集2』、大安出版社、1966年2月、461-468頁。

61) 申叔(劉師培)「『共産党宣言』序」、『天義』第16-19巻合刊(1908年3月)掲載、マルクス、因格尔斯「共産党宣言 The Manifesto of the Communist」民鳴訳、『天義』第16-19巻合刊(1908年3月)掲載、『中國資料叢書6 中国初期社会主義文献集2』、509-529頁。

62) Karl Marx and Friedrich Engels「共産黨宣言 The Communist Manifesto」、『幸徳秋水全集』第5巻、458頁。

63) ブルジョアジーとは、社会の生産手段を所有し、雇用労働を使用する資本家階級であ

ルスのこの定義を訳出しており、それゆえ「紳士」と「平民」の訳語が原語のニュアンスとは異なることを理解したうえで、あえて意識的にそれらの術語を選択的に当てていることは明らかである。実際、1906年の訳本においては、「プロールタリアン」というカタカナ表記とともに Proletarians という英語の表記がつけられている。<sup>(64)</sup>

幸徳が意識したその意図は、以下に紹介する幸徳自身の日本語訳の「訳者云」において明確に語られている。そもそも幸徳と堺の「紳士」と「平民」という用語の使用には、当時の日本における格差社会の問題に対する彼らの認識が現れていると考えられる。彼らは、1904年に発表した『宣言』日本語訳の「訳者云」において、次のように述べている。「紳士とは元来君子人を意味するの語なれども、近来日本に於ける紳士紳商と云ふが如き用法に従へば、私利的にして俗悪なる一般上流社会の人物を表現するの語として、其の頗る適切なるを見るに非ずや、但し或場合に於ては、或は市民と訳し、或は紳商と訳せり、平民の原語はプロールタリアンにして之を労働者と訳するも可なり」、と。<sup>(65)</sup>「平民」という訳語を選んだ理由について、堺は1930年に『平民新聞』のなかで、それが平民社の唱える「平民主義」という思想を表現するためだったと回想している。また、幸徳は「平民の要求」という論稿のなかで、「智能」・「正直」・「質朴」の「平民」や「労働者」と、「文明」・「仁愛」・「特権」の「紳士」とを対照させつつ、人口の大部分を占める「平民」は空腹で貧困であるが、彼らは少数の「紳士」が偽善的に提供した保護や救済を拒絶し、自らの仕事と生活を回復する権利を要求すべきであると主張している。<sup>(67)</sup>

---

る。プロレタリアートとは、生産手段を持たないので、労働力を売って生活を持続しなければならない現代の雇用労働者階級を指す。K.Marx and F.Engels, *Manifesto of the Communist Party*, English Translated by Samuel Moore (1888), Progress Publishers, 1966, p.40.

64) Karl Marx and Friedrich Engels「共産黨宣言 The Communist Manifesto」幸徳秋水、堺利彦訳、『幸徳秋水全集』第5巻、475頁。

65) カルル・マルクス、フリードリヒ・エンゲルス『共産黨宣言』、『平民新聞』第53号(1904年11月13日)、『幸徳秋水全集』第5巻、427-428頁。

66) 堺利彦「共産黨宣言日本訳の話」、『労農』第4巻第2号(1930年4月)、玉岡敦「『共産黨宣言』邦訳史における幸徳秋水／堺利彦訳(1904, 1906年)の位置」、16頁。

日本の伝統社会における武士階級以外の大多数の人びと、すなわち農民、職人、実業家、そして新たに出現した労働者と従業員を動員し、少数の金持ち階層に対抗する力を築くという考え方は、幸徳と堺が『宣言』の翻訳のなかで「平民」という訳語を通して表現しようとしていた平民主義の意味内容である。さらに、自由民権思想に基づきながら、社会の多数を占める民衆全体を広く解放しようとするかつての平民思想は、幸徳が「直接行動」論へと運動の戦略を転向した後も継承されており、その意味で彼の「中等階級」論もまた重要な概念であり続けている。平民社時代に『平民新聞』において幸徳らとともに「中等階級」論を展開した幸徳派の一人である西川光次郎の1907年の論説によれば、これまで時代を導いてきた「中等階級は社会の柱」たる階級であったが、こうした「旧中等階級」は次第に減少して、「新性質の中等階級」が増大しつつある。その「新中等階級」とは、官吏、会社員、教員、店員などをいう。この人たちの知識学問は「旧中等階級」に劣らない。しかし、時代の流れは、この「中等階級」に2つの方向での選択をせまっている。一方は資本家に順応し、他方は社会に不満を持って社会主義思想へと転じる、と。西川は、自分を含むすべての日本の社会主義者もまたこの「中等階級」の出身であると考えていた。平民社時代の幸徳派のこうした「中等階級」論は、渡米後の幸徳の直接行動論においても民衆の動員という点でいまなお重要な概念であったと思われる。

ともあれ、平民思想においてであれ中等階級思想においてであれ、幸徳らが『宣言』翻訳の際に「Bourgeois」の訳語で表現しようとしていたのは、単なる資本家階級ではなく、当時の日本において社会主義的な変革の攻撃対象となる既得権層であった。幸徳と堺において『宣言』のなかの「Bourgeois」とは、当時の日本社会ですでに現れていた多数の「平民」と「中等階級」に対立する金持ち階層として把握され、彼らは、「Bourgeois」という発展段階と階級としての「Bourgeoisie」を、金持ち階層から生まれた特定の既得権的な社

67) 幸徳秋水「平民の要求」、『平民主義』所収「平民と社会主義」（1903年11月29日）、幸徳秋水『幸徳秋水全集』第5巻、29-30頁。

68) 西川光次郎「中等階級の話」『平民新聞』第9号、1907年。なお、1907年の『平民新聞』は入手できなかったため、吉田悦志「日刊『平民新聞』における「中等階級」論」『文

会集団である「紳士閥」という形で概念化しなおしたのである。幸徳によれば、当時の日本社会において、この「紳士閥」を代表するのは、少数の人びとによって構成された「藩閥集団」であり、彼らは国家を支配し、日露戦争からも利益を得ていた。土佐出身の幸徳は、日本の伝統的な武士が身に付けていた純粋な道徳と勇気を懐かしんではいたが、彼の見るところ、現在の日本はさまざまな閉鎖的勢力で形成された社会であり、「閥の社会」に陥っていた。すなわち、党閥、財閥、門閥、宗閥、学閥などである。<sup>69)</sup>

以上のように、「Bourgeoisie」の訳語に「紳士」という術語を当てた背景には、閥社会を構成するさまざまな紳士閥による支配に対する幸徳らの批判的な見解が存在し、他方で「Proletariat」の訳語を「平民」と訳出した背景には、新たに出現しつつある労働者階級のみならず、農民、職人、実業家といった、紳士閥という既得権的な支配集団以外の大多数の民衆を広範囲に動員することをもって、当時の日本の政治社会状況に適合的な形で社会主義革命（すなわち「平民革命」）を実現しようとする幸徳らの意図があった。このように幸徳と堺の『宣言』翻訳には、当時の日本の政治的、社会的、経済的な格差と分裂の構造に即して、マルクスの社会主義思想を受容しようとしていた幸徳派の理解が刻印されているといつてよい。

## 2 天義派の『宣言』翻訳にみる幸徳の平民主義の受容：1908年

前述した天義派の劉師培が『宣言』の翻訳を通して強調しようとしていたのは、当時ヨーロッパで社会民主党が国内での議会闘争に甘んじていた現状に対する批判であった。それゆえ彼は、労働者の国際同盟の必要性を強調した。1908年の中国語版の序文のなかで、彼はこう述べている。「この『宣言』の叙述から観てみると、ヨーロッパのすべての社会の変遷が分かる。要するに、それは万国の労働者が団結して階級闘争を遂行することであり、容易ではない理論である」と。さらに彼は論点を変えて、『宣言』の主張をアナキズムの観点から言及する。「彼らの言う『共産』とは、民主制の下での共産であり、無政

---

芸研究』第45号、2009年、68頁を参照した。

69) Robert Tierney, *op.cit.*, p.182.

府制の下での共産ではない。したがって、共産主義は徐々に集産主義へと融合されてしまい、ここに国家という組織が認められてしまう。これによって、財産支配権が中心に戻らざるを得ない」と。このように、劉は、ヨーロッパの社会民主党の路線は国家を永久的に承認することとなり、国家の体制内での集産にとどまり続ける。『宣言』の中国語版を刊行するにあたって劉師培や民鳴が求めていたのは、国家体制内における労働者の団結ではなく、国家を超えた労働者の国際的な無政府主義的連合という考え方に基づいて、『宣言』を解釈しようとしていたことは明らかである。

1906年5月に、『民報』と梁啓超が編集した『新民叢報』の間で、中国が立憲君主制を実施すべきか社会革命を実施すべきかについての討論が行われた。その際に、孫文の盟友でもあった朱執信は「立憲党人」が政治革命及び社会革命の「主体」と「客体」を区別する必要があることを主張する。「政治革命の主体は庶民であり、その客体は政府である（広義）。社会革命の主体は細民であり、その客体は豪右である。民衆はすでに平民政府の意味を知っている。豪右と細民は Bourgeois、Proletarians という二つ英語の単語の意味である。両者の間には異なった意味があることを知らなければならない…」<sup>71)</sup>。1908年の民鳴訳の『宣言』中国語版が発表される以前には、劉師培は、「Proletarians」を「細民」と訳することについては朱執信の考え方を受け入れていたようである。クロポトキンの学説を紹介した際にも、彼は次のように述べているからである。「資本家の産業を保護し、細民を略奪すること」<sup>72)</sup>と。しかしながら、『宣言』の中国語版のなかでは、劉師培は、「Bourgeois」に「豪右」という訳語を、「Proletarians」に「細民」の訳語を当てた朱執信の訳出の仕方を継承してはいない。劉師培は、1908年の中国語版では、幸徳と同じように「Bourgeoise」を「紳士」と、「Proletarians」を「平民」と訳した。

70) 申叔（劉師培）「『共产党宣言』序」、『天义』第16-19卷合刊（1908年3月）、『中國資料叢書6 中国初期社会主義文献集2』、510頁。

71) 豪右は、中国の封建社会における裕福な地主層、名家のこと。朱執信「论社会革命当与政治革命并行」、『民報』第5号（1906年6月）、52-53頁。

72) 申叔（劉師培）「苦鲁巴特金学术略述」、『天义』第11、12 卷合册、1907年7月、『天义・衡报』万仕国、刘禾校注、中国人民大学出版社、2016年4月、259頁。

なぜ劉師培はこうした訳語の選択をしたのであろうか。そこには、明らかに『宣言』の日本語版を通した幸徳派の影響があり、中国語版を発売しようとした劉師培たちも、日本の翻訳者たちが抱いていた思考様式を保持しようとしていたからだと考えられる。彼は、1908年の中国語版の序文において、革命の対象としての「紳士閥」を、次のように説明している。「紳士閥とは、英語で Bourgeoisie と言い、資本家、富裕層、上流、権力者階級という意味である。紳士は英語で Bourgeois と言う。これも同じである。しかし、この紳士は、資本家となった中産階級の市民を指しており、貴族とは異なっている。それは中国の老爺<sup>73)</sup>という言葉と同じで、官吏を指しているわけではない<sup>74)</sup>」。ここには、前述した幸徳らの理解と同様に、「Bourgeoisie」をたんに資本家ではなく、既存の社会の既得権階層として把握しなおす劉師培の思想性がはっきりと現れている。

一方、1906年の幸徳の日本語訳版と1908年の劉の中国語訳版はどちらも、「proletariat」を「平民」と訳出することによって、『宣言』における階級構造と革命の意味を展開しなおしている。すなわち、1888年の英語版のなかの「The lower strata of the middle class —the small tradespeople, shopkeepers, and retired tradesmen generally, the handicraftsmen and peasants—all these sink gradually into the proletariat……If by chance they are revolutionary, they are so only in view of their impending transfer into the proletariat……<sup>75)</sup>」という文章を、幸徳は次のように翻訳している。「中産階級の下層——行商人、小賣商人、及び一般の商人上り、諸職人及び農夫——總て是等の者は漸次平民の間に沈まざるを得ず…若し彼等にして真に革命的なる場合ありとせば、そは彼等が將に平民に落ちんとするを悟るが為めに外ならず<sup>76)</sup>」と。他方、1908年の中国語版において、上記の箇所は、「行

73) 以前は庶民が役人に対して使った敬称。

74) 「申叔附识」、『天义』第16-19巻合冊（1908年3月）、万仕国、刘禾校注、前掲書、431頁。

75) K.Marx and F.Engels, *Manifesto of the Communist Party*, Progress Publishers, 1966, p53.

76) Karl Marx and Friedrich Engels 「共産黨宣言 The Communist Manifesto」、『幸徳

商人、小賣商人、職人、農民など中産階級のなかの下層も、次第に平民へと落ちていった。彼らが革命家となるためには、平民とともにあらねばならない(中等阶级之下层, 如行商、小卖商、诸职人, 以及农夫亦渐次而降为平民。使彼等而果为革命, 则非与平民为伍不可<sup>77)</sup>)と訳出されている。

このように、「proletariat」の術語を「平民」という概念で訳出することで、マルクスの「中産階級 (the middle class)」の分裂と没落という図式を読み換える幸徳らの日本語訳の思考様式は、劉師培らの中国語訳においても継承されていることは明らかである。このことは、幸徳にせよ劉にせよ、西洋外来のマルクスの社会主義思想を、日本あるいは中国というアジアの政治的、社会的、経済的な状況に適合的な形で受容しようとしていたことの現われである。しかしながら、このように「proletariat」を「平民」に変換したうえで「中産階級の下層」との連携を想定した革命、すなわち「平民革命」の構想は、マルクス自身が『宣言』のなかで想定していた革命の図式とは一致しない。周知のように、マルクスの本来の意図は、もともと中産階級に属していた人びとが資本主義の自由競争によって財産を失い、プロレタリアートになってしまったという点にある。言い換えれば、資本主義の発達にもなって旧来の中産階級の下層がプロレタリアート化し、革命の主体になりえる可能性を指摘したのである<sup>78)</sup>。しかし、日本の翻訳者としての幸徳と堺、そして中国の翻訳者としての劉と民鳴は、マルクスとは異なり、中産階級が「平民」階級に参加することを可能性の条件ではなく、日本や中国における革命の必要条件と見なしている。そこには、翻訳作業における意味内容の読み換えを通して、マルクスの社会主義革命を、アジアの状況と発展段階に即して発展的に受容しようとする態度が確認される。すなわち、日本の幸徳らの平民主義者あるいはアナキストにせよ、中国の劉師培らの革命派あるいはアナキストにせよ、『宣言』翻訳を戦略的に利用することで、中産階級を「平民革命」へと動員し、意識的に革命の主体としての平民の範囲を広げていこうとする意図が存在したといえよう。

---

秋水全集』第五卷、468-472頁。

77) 『共产党宣言 The Manifesto of the Communist Party』、『天义』第16-19卷合册、1908年、万仕国、刘禾校注、前掲書、659頁。

さらに、劉師培を代表とする中国のアナキストは、幸徳の思想転換の影響を受けて、孫文の民族革命に反対するという目的から、幸徳自身が採った戦略上の変更と同じように、革命主体の範囲を「労民」（労民）という形で広げようとした。劉もまた当時の中国の社会状況を踏まえて、幸徳の「平民」を、「労民」という形で発展的に展開していったのである。すなわち、「労民」という概念に、労働者（工場労働者、道路建設労働者、鉱夫など）だけでなく、小商人、そして農民、軍人、反抗者が結成した小グループ（大刀会、小刀会、宗教団体など）も含めている。彼は、「いまの中国において真正の大革命を起こさんとするならば、必ず労民革命を根本としなければならない」と考え、上記の労働者階級が職業や会党などに基づいて結成した大規模な連合を、アナキズムにもとづく中国革命の必然的な手段と見なしている。<sup>79)</sup>

以上のように、中国の劉師培ら天義派は、マルクスの『共産党宣言』を、平民と紳士という概念化や担い手としての中間階級の果たす役割、さらには社会民主党路線の限界をアナキズムによって乗り越えようとする思考などの点を踏まえるならば、日本の幸徳派の影響を受けながら、アナキズム思想の立場から中国語に翻訳したと考えられる。それゆえ、中国語版を発表した後の天義派のアナキズムの運動論には、同様な運命の下に置かれているアジアの民の越境的な連携を推進しようとする形において、アナキズム特有の脱国家的な普遍主義の傾向が現れている。アメリカから帰国してアナキズム運動へと舵を切った幸徳は、前述したように劉師培、章太炎、張継、何震といった中国のアナキストたちとともに「アジア和親会」を結成した。「アジア和親会」が結成された直後の10月20日に幸徳がインド革命に言及した際、彼は社会主義をコスモポリタニズム的な展望において語っている。世界の革命党を統一するという方針に立たない限り、社会主義革命の目的を達成することは困難である、と。さらに、1908年1月に幸徳は、フィリピン、ベトナム、韓国の革命家たちに、国や人種を問わず、「世界主義と社会主義の旗幟の下に直ちに大連合を形

78) マルクス『哲学の貧困』岩波文庫、1950年、168頁。

79) 无署名「论中国宜组织劳民协会」（『衡報』第5号、1908年6月に掲載）、万仕国、刘禾校注、前掲書、668-670頁。

成する」ことを呼びかけた<sup>80)</sup>。他方、劉師培もまた『天義』の第11・12巻合併号において、「**亞洲現勢論**（アジアの現状に関する論説）」を掲載したが、そのなかで1907年当時のアジア諸国が置かれた状況を正確に把握したうえで、日露戦争後の日本政府は「朝鮮の敵であるだけでなく、インド、安南、中国、フィリピンの公敵」だと指摘し、アジア諸国の民衆が強大な力を持って自らを解放するためには、汎アジア的な連帯が必要であると主張している。幸徳と中国のアナキストたちが設立した「アジア和親会」は、第一インター期にバクーニンが設立した「ジュラ同盟」をモデルとする、汎アジア的な無政府主義団体であったと考えられる。「アジア和親会」の英訳である「The Asiatic Humanitarian Brotherhood」の「Humanitarian Brotherhood（人道的同胞愛）」という言葉も「ジュラ同盟」の基本理念であった<sup>82)</sup>。「アジア和親会」は、「ジュラ同盟」と同様に、「民族主義、共和主義、無政府主義、社会主義」など、異なる政治思想を持つ人びとをそこに糾合することによって、汎アジア的な民衆の連帯を目指していたのである<sup>83)</sup>。

このように、幸徳と天義派が志向していた「世界主義」と「社会主義」の思想は、マルクスの『共産党宣言』における「万国の労働者よ、団結せよ」という命題を、アナキズムがもつ国家を超えた普遍主義の思想的射程にもとづいて、汎アジア的な連帯として展開しようとするものであったといえよう<sup>84)</sup>。

## むすび

『共産党宣言』の中国語版は、1907年から1908年にかけて東京で交わされた中国と日本の革命家たちの緊密な交流と協力の成果である。「万国の労働者よ、

80) 幸徳秋水「病間放語」、『幸徳秋水全集』第6巻、384頁。

81) 申叔（劉師培）「**亞洲現勢論**」、『天義』第11-12巻合刊（1907年11月）掲載、万仕国、刘禾 校注『天義・衡報』（上）、中国人民大学出版社、2016年、176頁。

82) Peter Kropotkin, *Memoirs of Revolutionist*, Black Rose Books, 1989, p.261-262.

83) 陶鑄（治公）『『亞洲和親会約章』中文抄稿』、万仕国『劉師培年譜』、廣陵書社、2003年、101頁。

84) なお、清朝後期の天義派のアナキズム思想と汎アジア的な連帯については、本稿の考察を踏まえ、稿を改めて詳述する予定である。

団結せよ！」という言葉に触発されて、日本の社会主義者である幸徳秋水は、政府の弾圧を受けるなか、あえて帝国主義を批判して「平民革命」を唱えた。本稿で確認してきたように、幸徳の平民主義とアナキズムの思想は、1906年頃の転換前後の彼の言説から判断するに、一定の連続性が存在していた。しかしその理念は、社会主義革命を実現する運動の方法論という点では、状況次第で変換可能な二つの路線を許容しえたのである。すなわち、1903-1906年の時期に中産階級が主体となって国内で平等な権利のために戦った局面では、平民革命は議会政策路線を採用していた。これに対して、1907年以降は、幸徳は一切の国家や政府の権力を平民革命にとっての敵であるとみなし、アナキズム的な「直接行動」論を採用した。それに伴い、幸徳派はもとのマルクスの革命の構図を独自の枠組の下で理解しなおし、革命の主体と見なしている「平民」の範囲を拡張して「中等階級」論を展開したのである。

中国の記者である劉師培は、1907年から1908年にかけて幸徳を代表とする日本のアナキストとの交流を通して、中産階級を「平民革命」へと動員する幸徳派の革命の構図を受容し、幸徳と同様に意識的に革命の主体としての平民の範囲を広げていこうとした。さらに、劉師培は当時の中国の状況を踏まえて、大規模な連合を中国革命の必然的な手段と考えるようになった。それゆえ、彼は「平民革命」を、体制に不満を持つ労働者、農民、軍人から結成される小グループによる広範囲な連帯をめざす「労民革命」へと展開していったのである。<sup>85)</sup>『宣言』翻訳を触媒としながら形成された清朝末期の天義派のアナキズムの運動論は、アジアの呼びとの越境的な連携を促すという目的のもとで、マルクスの『宣言』がもつ国際主義的な精神を発展させ、国や人種を超えた汎アジア主義へと昇華された。それは、かつてともに革命派として同盟会に属していた孫文の民族主義的な革命戦略とは著しく対照的なものであったといえよう。

(創価大学法学研究科博士後期課程)

---

85) 天義派の動員戦略は、個々人が必要に応じて連携しようとする社会的本能にもとづくという意味で、幸徳よりもむしろバクーニンやクロボトキンのアナキズムに接近するものであったと考えられる。この点において、天義派のアナキズムには、同じく幸徳の思想的影響を受けた大杉栄のアナキズムと親和性を確認することができる。拙稿「大杉栄のアナキズム思想と革命実践の構想 — 「本能」と「征服の事実」の観点から —」『創価大学大学院紀要』第42号、2021年、31-45頁参照。

